

現代日本若年女男「子育て」をめぐる3つのデータの考察 ——「脱・過剰自己実現欲求」女?/「豊かな男」の新たなフロンティア?/ 「生きづらい男」の最終アジール?——

桜井 芳生

(鹿児島大学)

若年女男「子育て」をめぐる3つのデータを通覧的に分析考察した。女性大学生について、「将来、子育てに生きがいを感じられれば、必ずしも仕事や趣味で生きがいを感じられなくてもいい」と考えている女性ほど、「生きづらさ」を感じない。子持ち男性について、子育てを楽しんでいる子持ち男性は、「リッチ・リソース→ハイ・ダイヤモンド」である。男性大学生について、「将来、子育てに生きがいを感じられれば、必ずしも仕事や趣味で生きがいを感じられなくてもいい」と考えている男性ほど、「生きづらさ」を感じる（第一と逆!）。以上の知見が得られた。これらに対し、女性学生：過剰自己実現欲求からの脱却としての子育て生きがい領域。子持ち男性：比較的資源的にリッチなひとたちの、新たな自己実現領域としての子育て領域。男性学生：世俗的成功が不安定な生きづらい層の追い詰められた生きがい領域としての子育て。以上の通覧的解釈を提示した。

1. 目的 現代日本若年女男「子育て」をめぐる3つのデータ

現代日本若年女男「子育て」をめぐる3つのデータセットを通覧的に分析考察する機会を得た。筆者が寡聞であるためともおもうが、それぞれ未見と思える洞察がえられた。それらを類型に値するものとして列して、読者諸賢のご批判を仰ぎたい。

2. 方法

3つのデータをそれぞれ、重回帰分析し、通覧的に解釈を提起する。

2.1 第一データ

2014年12月～2015年1月に、南九州のある国立大学法人の学生たちによって、周囲の学生を中心とする知人たちを対象にして、回答者にまた回答者を紹介してもらうという多段階スノーボール方式で、非無作為抽出によるアンケート調査をおこなった。依頼数270人、回収数229人。回収率84.8%であった。

2.2 第二データ

SSJ データアーカイブより。「子ども・子育てに関するアンケート (SRC 自主調査 002), 2012【特別データ】」(株式会社サーベイリサーチセンター)。調査地域：日本全域。調査対象：日本国内に居住する 18 歳以上の男女個人のうち、0～6 歳の子どもがいる親。標本抽出条件:大都市「政令指定都市及び東京都 23 区」1000。それ以外で人口 5 万以上 1000。それ未満 1000。平成 24 年 10 月 27 日(土)～10 月 31 日(水)。インターネット調査(インターネットリサーチモニターに対するクローズド調査)。有効回答：3,000 サンプル(政令指定都市及び東京都 23 区 1,000、それ以外で人口 5 万以上 1,000、それ未満 1,000)。

2.3 第三データ

2015 年 6 月～7 月に、南九州のある国立大学法人の学生たちによって、周囲の学生を中心とする知人たちを対象にして、回答者にまた回答者を紹介してもらうという多段階スノーボール方式で、非無作為抽出によるアンケート調査を行った。依頼数 500 人、回収数 310 人。回収率 62.0%であった。

3.1 結果：第一データ分析

女性学生のための分析を示す。設問「あなたは生きづらさを感じることはありますか as」(末尾の小文字アルファベットは変数番号。再分析時の便宜のため残す。以下同様)、この変数と有意な相関(ケンドールの順位相関係数による)を示す変数をすべてピックアップし、変数「生きづらさ」の独立変数と解釈できない変数を除き、変数「生きづらさ」を従属変数とし、それらを諸独立変数とする線形重回帰分析をおこなった。SPSS の変数減少法で得られた最終モデルが以下である。

表 1 「生きづらさ」回帰分析

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
10	(定数)	2.411	0.594		4.059	0
	中学明るい bb tyukura	-0.183	0.075	-0.171	-2.454	0.015
	神経質傾向 shinkei	0.197	0.039	0.353	5.082	0
	(異質な経験への) 開放性 kaiho	0.13	0.03	0.295	4.292	0
	子育てで ao koiki	-0.143	0.06	-0.16	-2.369	0.019
従属変数「生きづらさ as」 ikizura						
調整済み R2 乗		0.323				

3.2.1 結果：第二データ分析。「従属変数:子育ては楽しいか」分析

第一データの分析との対比意識より「子持ち男性のみ」分析対象とした。ちなみに、対象男性の年齢の平均、標準偏差は、以下のとおりであった。

表 2 年齢

年齢	度数	平均値	標準偏差
	1278	39.05	5.113

ここからわかるとおり、このデータセットの分析対象は、題名にいうほどの、「若年」ではない。まず、対象男性の「子育ては楽しいか」意識を従属変数と見立て、その諸独立変数との関係を示すモデルを目指した。意味的に言って「子育ては楽しいか」意識の原因となりうる解釈できる変数（設問）で、「子育ては楽しいか」意識とのケンドールの順位相関係数が有意な変数を虱潰しにピックアップした。それらの変数を独立変数とし、「子育ては楽しいか」意識を従属変数とする、線形重回帰分析を行った。こうして得られたモデルが以下である。

表 3 子育ては楽しいか 回帰分析

モデル	非標準化係数		標準化係数		t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ			
(定数)	1.8	0.105			17.133	0
世帯年収	-0.086	0.028	-0.085		-3.065	0.002
緊急時にお子様を預かってくれる親族、友人・知人等の有無	0.169	0.053	0.088		3.191	0.001
子どもの年齢：0歳	-0.104	0.061	-0.048		-1.7	0.089
同居家族の構成：兄弟姉妹	0.123	0.042	0.081		2.915	0.004
子育ての不安や悩みの対応法：医者や看護師等、医療関係者に聞いている	-0.125	0.072	-0.049		-1.746	0.081
a. 従属変数 子育ては楽しいか						
調整済み R2 乗	0.023					

回答肢への値の振り方より、たとえば、世帯年収のヨリ大きな子持ち男性ほど「子育てが楽しい」と感じている（他も同様。逆は逆）。ただし、以上だけでは、調整済み R2 乗値も小さく、全体的なイメージもつかみにくいので、以下の分析もおこなった。

3.2.2 結果：「独立変数：子育ては楽しいか」分析

上記の「意味的に言って「子育ては楽しいか」意識の原因となりうる」と解釈できる変数」以外の変数で、「子育ては楽しいか」意識とケンドールの順位相関係数が有意なものをピックアップした。それらのそれぞれを従属変数として投入し、「子育ては楽しいか」意識を独立変数として投入した線形単回帰分析を複数回おこなった。ただし、筆者としては、以下の関係は、厳密に論理的な意味での「因果」関係であるとの解釈には、固執しない。むしろ、「子育ては楽しいと感じるパパは、一方でこんなヒト」といったラフなイメージで捉えてほしい。

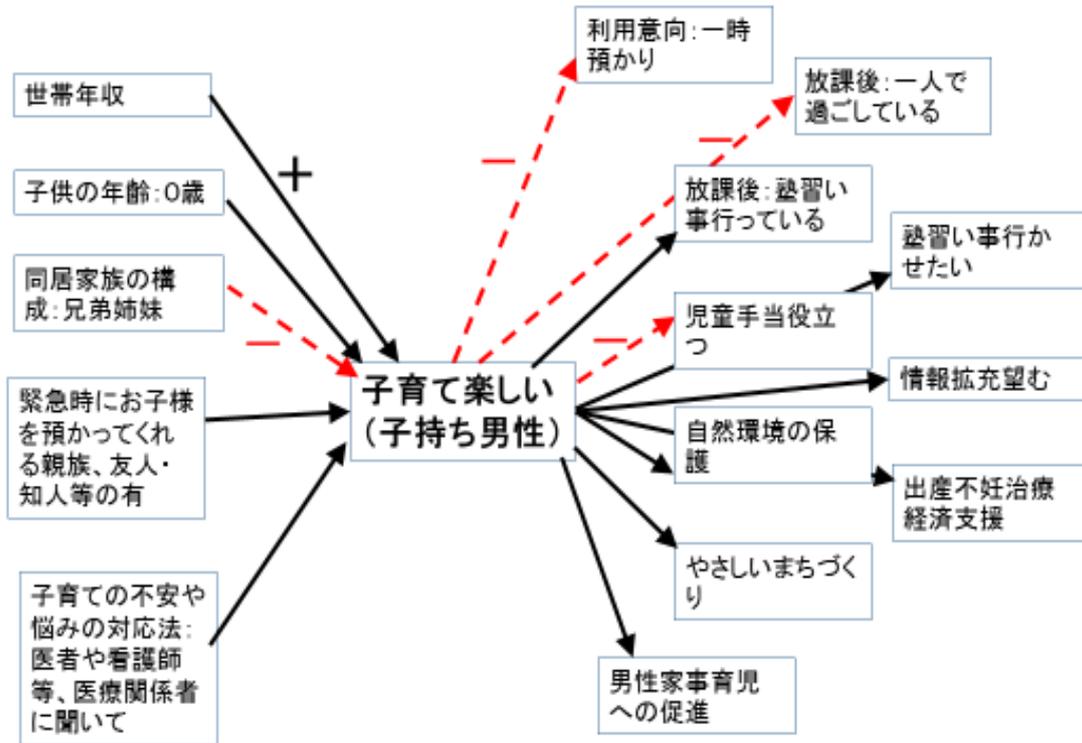
表4 子育ては楽しいか：独立変数

係数 ^a						
モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	0.069	0.03		2.28	0.023
	子育ては楽しいか	0.038	0.015	0.086	2.532	0.012
a. 従属変数 (3～6 歳) 今後の日中の定期的保育以外の利用意向：一時預かり						
調整済み R2 乗						
0.006						

回答肢への値の振り方より、「子育てが楽しい」子持ち男性は、「(3～6歳) 今後の日中の定期的保育以外の利用意向：一時預かり」への意向が低いと解釈できる。

以下行った分析すべての数表を示すと多数になるので、定性的関係をパス図で示す（次図）。

図1 パス図



(直線は正の関係、破線は負の関係)

3.3 結果 第三データ分析

第一分析、第二分析との対比のため、男性学生のみ分析した。「あなたは、将来、子育てに生きがいを感じられれば、必ずしも仕事や趣味で生きがいを感じられなくてもいいと思いますか?bo」を、変数「子育てに生きがいを感じられれば」と呼ぶことにしよう。この変数と有意な相関(ケンドールの順位相関係数による)を示す変数をすべてピックアップし、意味的に変数「子育てに生きがいを感じられれば」の独立変数と解釈できない変数を除き、変数「子育てに生きがいを感じられれば」を従属変数とし、それらを諸独立変数とする線形重回帰分析をおこなった。有意確率が10%以上のものを外し、得られたものが、以下のモデルである。

表5 子育てに生きがいを感じられれば

係数 ^a								
モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
最終	(定数)	2.485	0.492		5.056	0		
	生きづらさ	0.299	0.128	0.204	2.336	0.021	0.926	1.08
	地位	0.298	0.126	0.207	2.372	0.019	0.927	1.079
	ec 中学成績	0.218	0.116	0.158	1.877	0.063	0.998	1.002
a. 従属変数 bo 子育てに生きがいを感じられれば、								
調整済み R2 乗		0.115						

独立変数の設問文は以下のとおりであった。「あなたは、生きづらさを感じることはありませんか?br」「あなたは、社会的地位を気にしますか?bk」「中学時のあなたの成績はどうでしたか ec」

4.1 議論：第一データ

まず、第一データの分析結果から議論してみよう。(以下、このデータセットにたいする筆者の初出論文である(桜井 2015)の文章を、正確を期すため一部利用している)。

とくに、本調査において、発見的価値があったとおもえるのが、第四の独立変数である。その設問文言は、「将来、子育てに生きがいを感じられれば、必ずしも仕事や趣味で生きがいを感じられなくてもいいと思いますか」ao で、あった。

値のふりかたと、ベータの値より、「将来、子育てに生きがいを感じられれば、必ずしも仕事や趣味で生きがいを感じられなくてもいい」と考えている女性ほど、「生きづらさ as」を、感じない、のであった。

線形重回帰分析のロジックより、「中学時代の暗さ」や神経質傾向・開放性といった性格的・心理的要因を統制しても、そう、なのである。ベータの絶対値は大して大きくないといえるかもしれないが、当初投入した 13 個の変数の中の、4 個に生き残り、しかも、有意確率は、.019 と十分に小さい。これは、注目にあたいしよう。というか、無視はしがたい現象ではないだろうか。寡聞にして、このような「育児で終わってもイイ」意識と「生きづらさ」が負の相関をしている、他の調査結果を私には知らない。

尾上は、「近代核家族はどこまで「近代的」か?」(尾上 2014)において、ヒトの性役割分

業の人類史貫通的普遍性が、現在の考古学・古人類学では、定説となりつつある、という。たとえば、二足歩行化と脳の肥大化・消化器官の縮小等による難産化・育児期間の延長が、ヒトの男をして狩りの獲物(肉)をホームベースで待つ女と子どもに分け与える性役割分業を生じせしめたというオーウェン・ラヴジョイの理説を紹介している。どうやら、ヒトの進化史において、何らかの程度でのいわゆる性役割分業はほとんど普遍的であった可能性が高そうだ。とすると、われわれは、人生のかなりを採集と育児についやしたヒトのメスたち(母、祖母たち、曾祖母たち、曾々祖母たち、曾々々祖母たち、曾々…々祖母たち)の直系の子孫であることはほぼ確実だろう。くりかえすがあくまで他の3つの変数を統制すれば、上記の現象は、このような祖先母のような生活でもそこで充実できればそれでいい、と考えている女性ほど、「生きづらさ」を感じていない、と解釈できる(逆は逆)、かもしれない。(この祖先母は、途中で「男系」「父方」がはいってもまったくかまない。その意味で、母の母の母の……の母は、アフリカのエヴァにいきつく、といったはなしとはまったくことなる、ので注意)。

4.1.1 過剰自己実現欲求仮説？

有名なマズローMaslowの欲求段階説がある。マズローが提起したのは、文字通りあくまで、欲求段階仮説である。下位の欲求が満たされると、ヒトは次のより上位の欲求の充足を求めるようになる。そして、その最上位には、自己実現欲求がある、というたんなる仮説にすぎない。しかし、いまや「豊かな社会」では、先進国の国民(例えば日本人)ならだれでも、自己実現をめざすべき、とでもいうような「暗黙の空気」が存在していないだろうか。しかし、だれもが「自己実現」などできるものだろうか。実現困難な過剰な自己実現欲求をもった若者が「生きづらさ」を感じやすいのかもしれない。それにたいして、自分の直系の祖先たちが営々とおこなってきたこと(ここでは子育て)だけでも満足できそうなヒト、そういうヒトは「生きづらさ」を感じにくいのかもしれない。#

言うまでもなく、以上はたんなる思弁(スペキュレーション)にすぎない。

4.1.1.1 (補論1「ヒュームの法則」をめぐって)

本節からは補論なので、関心ない読者はとばしてほしい。以上の議論に、直感的な反感を感じるような人たちがいるようである。筆者としては、その反感の筋道をあまり追歩できないので、弁明しようがないのだが、数点に気になる点があるので、述べてみたい。まずは、いうまでもないと思うが「ヒュームの法則」をめぐってである。「～である」という命題(以下「事実命題」と呼ぶ)、から「～すべき」という命題(以下「当為命題」と呼ぶ)は導き出せないとする原理である。

いうまでもないと思うが、本稿はなんら、ヒュームの法則を侵犯していない。本稿が提起しているのは、命題#という事実命題であり、そこから必然的になんらの当為命題は導き

れない。

もちろん、命題#は、検証されたとでもいうにはほどとおく、今後の検証ステップが待たれる。

4.1.1.2 (補論2「自然な仮定を付加すれば」)

しかし、反論(反感)は、さらに続くかもしれない。たしかに命題#自体は、ヒュームの法則を侵犯していないかもしれない。しかし、たとえば、「貴女が、生きづらさを回避したければ、」といった自然な仮定を付加すれば、「貴女は、子育て(と採集)だけで、満足すべきだ」という当為命題が導出される\$、と。筆者としては、この推論\$に、とくに異論はない。

4.1.1.3 (補論3「育児と採集にのみ専念できるなんて」)

論者はさらに続けるかもしれない。「そんなこと言たって、現代日本で、女性が育児と採集にのみ専念できるなんて、非常に条件が限られている。¥」と。筆者としては、この意見¥についても、とくに異論はない。

4.1.1.4 (補論4 コンペなしに解釈を否定しても…、)

もう一つ別の角度から述べたいことがある。命題#は「3.1」で見出された知見(ファインディング)に対する解釈、である。代案解釈とのコンペ(比較競争)なしに、ある解釈を否定しても生産的でないように思われる。またそのさいには、本稿の解釈と代替解釈のありそさを比較評定できるようなフューチャーリサーチを提示し、じっさい次の作業でそのリサーチを実行してみるのが、生産的であると思う。(補論終わり)

4.2 第二データ

第二データの分析結果についてかんがえてみよう。強いてまとめれば、子育てを楽しいと感じる子持ち男性は、「リッチ・リソース(すでに豊かな資源をもっており)→ハイ・ダイヤモンド(そうでありながらもまた、要求水準が高い)」とまとめられるのではないか。

子育ては、「豊かな男」にとって、新たなフロンティア?になりつつあるのかもしれない。

4.3 第三データ

第三データの分析結果についてかんがえてみよう。ここで、注目に値するのが、「生きづらい」と「子育てで生きがい」との相関関係が、第一調査の女性のそれと、完全に反転していたことであった。

すなわち、第一調査の女性では、「子そだてで、生きがい」と回答していた女性大学生が、「生きづらい」と回答していなかったのに比して、第三調査の男性大学生では、「生きづら

い」ひとそが、「子育てで、生きがい」と回答していたのであった。

男性においては、「生きづらい」に同様に影響していた変数は、「地位気にする」「(中学時代の)成績」であった。

中学時代の成績がよく、地頭がいい(と自覚し)、高い地位や所属をもとめながらも、現今の社会上状況では必ずしもうまくいきそうもなく「生きづらい」と感じている、そんな男性学生が、いわば追い詰められながらも享受できそうな「生きがい」フィールド(アジール＝安全逃避地)として子育てを見立てている、そんな図式を立ててみることはできないか。

以上3つのデータセットについての議論をまとめると以下の表になるだろう。

表6 まとめ

現代日本女性大学生	現代日本子持ち男性	現代日本男性大学生
過剰自己実現欲求からの、いわば「さとり」(脱却)としての子育て生きがい領域	比較的資源的にリッチなひとたちの、新たな自己実現領域いわば「フロンティア」としての子育て領域	地頭の良さを自覚しつつも地位獲得が不安な生きづらい層の、追い詰められたアジールの最後の?生きがい領域としての子育て

4.4 議論(つづき)

以上、現代日本若年男女「子育て」をめぐる3つのデータセットをいわば探索的に分析し、議論においても、いわば探索的な解釈(たしかではないが、すこし大きな絵)を描いてみたつもりだ。この解釈の成否は、今後の調査(フューチャーリサーチ)で確認していくしかないだろう。

ただ、子育てについて、ここでひとこと述べておきたいことがある。それは、これまで、とかく、「こどもを持ちたい(産みたい)」「こどもを育てたい」といふ当事者たちの気持ち(動機・アスピレーション)が、所与あるいはブラックボックス化されていたのではないか、ということだ。「産みたいのに、(いろいろ制約・コストがあつて)産めない」「子育てしたいのに、(いろいろ制約・コストがあつて)できない」## といったような暗黙の図式が多かったのではないだろうか(先行研究としては僅かに、柏木2001、などをのぞいて)。

したがって、「政策的」対処としては、上記の「いろいろな制約・コスト」をいかに軽減・削除するかという発想になりやすい。しかし、本稿でのべたかったことの一つは「「こどもを持ちたい(産みたい)」「こどもを育てたい」といふ当事者たちの気持ち(動機・アスピレーション)」自体が、当事者さん個々の境遇によっていろいろある、ということである。どう「いろいろある」のか。これを探りたいわけだ。いうまでもなく、これは、上記##に

対する、論理的先決問題である。

[謝辞]〔二次分析〕にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「子ども・子育てに関するアンケート（SRC 自主調査 002）、2012【特別データ】」（株式会社サーベイリサーチセンター）の個票データの提供を受けました。記して感謝します。

二次分析研究会の皆さん、とくに瓜生淑子先生、堤孝晃先生、からのご教示に多くを得た。とくに記して感謝します。

[参考文献]（End Note Web 使用。SIST02-2007 形式による）

柏木，恵子．子どもという価値：少子化時代の女性の心理．中央公論新社，2001，vii，236pp.

尾上，正人．2014．“近代核家族はどこまで「近代的」か？ — 一夫一婦制・性役割分業をめぐる進化論争からの示唆—。” in 第87回日本社会学会大会 研究報告題目・要旨．<http://www.gakkai.ne.jp/jss/research/87/42.pdf>

桜井，芳生．現代日本若年女性の「生きづらさ」のもう一つの要因：「過剰自己実現欲求」仮説．鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集．2015，vol. 82，p. 17-28.

本稿は、以下誌の査読プロセスを経て新たに発表するものである。匿名の査読者からのご指摘に感謝する。『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』の編集委員会ならびに事務局の関係者の皆様に感謝いたします。